

平安朝のり・テアリ・タリ

田 中 みどり

はじめに

一 平安朝のり・テアリ・タリの用法

一・一 リ（ハアリ）

一・二 テアリ

一・三 タリ

二 リ（ハアリ）・テアリ・タリの意味

三 給へり

四 仮定——「たらむ」「たらば」「たりとも」

五 動作が順次行われる——「たるものならば」「たれば」

「たれど」

結び

四段動詞・サ変動詞にしか接することのないリ（ハアリ）は、しだいにタリに近づき、継続の意味で用いられるようにもなった。また、補助動詞「給ふ」に接する際は、リ（ハアリ）を用いた。

「たらむ」「たらば」「たりとも」は仮定の意味を含み、現代語では「…だったならば、（くだらう）」と訳すこととなる。これは、仮定の非現実性が、過去の非現実性とまじわるところに生まれる表現である。

また、「たるものならば」「たれば」「たれど」は、動作が順次行われることをあらわすとき、ひとつひとつの動作が完了したかのように考えられることがある。そこで、タリは完了の意味に近づいていく。

〈仮定〉〈動作が順次行われる〉を現代語に訳す際、「た」という語を用いることがあるが、その本来は、リは存在をあらわし、タリは持続をあらわすことになった。

以下の引用は、

岩波新日本古典文学大系『萬葉集』（1999年～2003年）、
『古今和歌集』（1989年）、『後撰和歌集』（1990年）『竹
取物語 伊勢物語』（1997年）『枕草子』（1991年）、『源
氏物語』（1993年～1997年）、小学館新編日本古典文学
全集『土佐日記』（2015年）

に拠る。また、岩波新日本古典文学大系を「新大系」、小学館新編
日本古典文学全集を「全集」と略す。

なお、用例の検討には、以上の『萬葉集』『古今和歌集』『後撰
和歌集』『竹取物語』『伊勢物語』『枕草子』『源氏物語』『土佐日記』
のほか、岩波新日本古典文学大系『拾遺和歌集』（1990年）
『後拾遺和歌集』（1994年）『金葉和歌集 詞花和歌集』（19
89年）『千載和歌集』（1993年）『新古今和歌集』（1992
年）を用いた。

はじめに

動詞は、瞬時に動作を起こすことをあらわすこともあれば、
持続的に動作を続けることをあらわすこともある。換
言すれば、動詞は、時間的・空間的に、あらゆるものを含
み得る巾をもつものである、ということである。

そのうち、存在をあらわす「有り」と動作をあらわす
「為(す)」とは、もつとも基本的な動詞である（「有り」を、
特別に「存在詞」という）。その「有り」と「為」とをもつて、

状態的な「有り」で持続を、動作的な「為」で動作を起こ
すことをあらわしたのが、上代の人々であった。一般に助
動詞とされている上代のりは、りを含む語の構成が（動詞
連用形＋アリが熟合したもの）であり、また、実質的な
「有り」の意味を残した例もあるので、りは語尾と考える。
同じく助動詞とされている上代のスも、語尾である。

萬葉集においてリ（ハアリ）は、現存・存続・判断・確
述をあらわした。また、状態性語尾ともなり、「しした、
その結果、今ある」の意をあらわすものでもあった。「見
る」「今」「現」「時」「盛」などとともにあらわれる上代の
「リハアリ」は、〈現存〉をさし示すもの、と考えること
に誤りはない。が、本来は、「リハアリ」を分出しない動
詞だけのものにも等価であるに過ぎないもの、とも言ふこ
とができる。スも、これがあってもなくても意味に変わり
のない、動詞だけのものにも等価である語で、その意味は、
「動作を起こす」ことである。

接統助詞テにアリが接したテアリのアリには、いまだ存
在の意味が含まれ、テアリは現代語訳すれば「たある」に
あたる。

そのテアリが熟合してできた助動詞タリは、存続「てい
る」「である」をあらわすものとなる。その中には、いま
だテアリの存在の意味を残した「たある」もある一方、

「みやびたる」「後れたる」のように、状態性の動詞に接する場合には、まったく状態性の語尾となっているものもある。また、「おこせたる衣」のように、「贈ってくれた、^①そして今日の前にある」の意のものもある。

上代の日本語は、アリヤスのような語尾を活躍させることでアスペクトを表現し、イ・ユ・マ・ミ・サ・タ・フト・タマ・タカ・トヨ・ウヅノ・オホなどの接辞を用いることで畏敬・賛称・美称・尊称などを表現した。これらは後には、助動詞であらわしたり、副詞であらわすこととなるものである（接辞のうち、マは「真正な」、サは「若々しい」、オホは「大きい・多い」などの意で、後の時代にもつづく）。また、格をあらわす助詞もかたまつてはいず、シを挿入することで、文節の区切りを示したりもした。さらには、

○…大舟を 漕ぎわが行けば（許藝和我由氣婆） 沖つ波 高
く立ち来ぬ…
〔萬葉十五・3627〕

の「わが」のような、アイヌ語やアルタイ諸言語の人称接辞に似た語法も存在する。和歌以外は、単語のレベルの日本語しか遺っていない中でも、これらの特徴は、平安朝以後の日本語と際立った違いを見せる。この変化は、朝鮮半島の言語や中国の言語の影響を大きく受けた結果であろう^②。

平安朝のりには、すでに現存の意味はない。スも姿を消した。新しく起こった用法もありながら、旧を受け継ぐ部分もある。その時代から現代までは、1200年の歳月を経ている。したがって、現代の人々がもっている時間・空間概念とは異なった世界の切り方も存在する。もとより古代語を現代語に一对一で置き換えることは不可能である。

それを無理に置き換えてしまったために、現代語では説明ができないものも多数ある。リ・タリも、それをまぬがれるものではない。一般に、リもタリも完了の助動詞と言われ、ときには完了を、ときには存続をあらわす、と解釈されている。たとえば、土左日記では（以下の本文および訳は、小学館 新編日本古典文学全集『土佐日記』に拠る）、
リは、

○講師、馬のはなむけしに出でませり。
訳 国分寺の僧殿が、わざわざ餞別に来なされた。〔一六頁〕

○まさつら、酒、よき物奉れり。

訳 Ⅱ まさつらが、酒や、けつこうな品物を（一行の長に）さしあげる。〔二二頁〕

○海のほとりととまれる人も遠くなりぬ。

訳 Ⅱ 海辺にとどまっている人も遠くなつてしまった。

〔二五頁〕

○今日、海荒げにて、磯に雪降り、波の花咲けり。ある人のよめる、：

訳||今日は、海が荒れ模様で、磯には白波がまるで雪が降ったようで、波の花が咲いている。ある人が詠んだ歌は、：「三七頁」

などの訳がなされている。第四例にはりの使用が続いていて、「咲けり」は「咲いている」、「よめる」は「詠んだ歌は」と訳されている。現代語訳では、ふたつの訳は遠いものに見えるのだが、土左日記の書かれた時代には、これらには、ひとつづきの意味のつながりがあつたはずである。さらに、「よめりける」

○ある人のよめりける、

訳||ある人が詠んだ歌は、「三四頁」

も「詠んだ歌は」と訳されていて、訳では、「よめる」と「よめりける」との違いがはつきりしない。タリも、

○今日、海に波に似たるものなし。

訳||今日は、海に波らしいものはない。「四一頁」

○島坂にて、人、響應したり。

訳||島坂という所で、ある人が、もてなしをしてくれた。

「五四頁」

○いふかひなくぞ、こぼれ破れたる。

訳||言いようもなく、壊れてぼろぼろになっている。

「五五頁」

○たよりごとに物も絶えず得させたり。

訳||幸便があるたびに、（お礼のつもりで）物品も絶えずあげたのである。「五五頁」

○今生ひたるぞまじれる。

訳||新しく生えたのもまじっている。「五五頁」

○おほかたの、みな荒れにたれば、「あはれ」とぞ、人々いふ。

訳||あたり一面がみな荒れてしまったので、「ああ、しみじみと悲しいことだ」と人々は言う。「五十五頁」

など、時により、さまざまな訳がなされている。これも、当時の人々にとっては、根の同じことばであつたはずである。

萬葉集のように、歌の成立時期が長い期間にわたるものであれば、時期により用法が変化することはある。たとえば、萬葉集卷第十八4125〜4127七夕歌および反歌

七夕の歌一首 短歌を并せたり

天照らす 神の御代より 安の川 中に隔てて 向かひ立ち
袖振りかはし 息の緒に 嘆かす児ら 渡り守 舟も設けず
橋だにも 渡してあらば（波之太东母 和多之弓安良波）そ
の上ゆも い行き渡らし 携はり うながけり居て 思ほしき
言も語らひ 慰むる 心はあらむを なにしかも 秋にしあら
ねば 言問ひの 乏しき児ら うつせみの 世の人われも こ

こをしも あやに奇しみ 行き変はる 年のはごとに 天の原
振り放け見つつ 言ひ継ぎにすれ

反歌二首

天の川 橋渡せらば（波志和多世良波） その上ゆも い渡ら
さむを 秋にあらずとも
安の川 い向かひ立ちて 年の恋 日長き見らが 妻問ひの夜
そ

右、七月七日、仰見天漢、大伴宿禰家持作

〔萬葉 十八・4125〕4127 家持〕

の長歌「橋だにも 渡してあらば」と反歌の「橋渡せらば」とは相重なるもので、長歌では「してあら」であるものが、反歌では「せら」となっている。アリ（√リ）は現存をあらわすが、テアリのアリも、やはり存在の意味を残し、現代語にすれば「たある」とするのが適当である。そして、萬葉集末期の家持の意識においては、アリ（√リ）は、テアリに近いものであったであろう。そのテアリが熟合してタリとなったとき、

○卯の花の 咲く月立ちぬ ほととぎす 来鳴きとよめよ 含
みたりとも（敷布美多里登母）

〔萬葉 十八・4066 家持〕
○針袋 取り上げ前に置き 返さへば おのともおのや 裏も
継ぎたり（宇良毛都芸多利） 〔萬葉 十八・4129〕

のように、タリは、存続「ている」「てある」をあらわす

ものとなる。

平安朝において、リ・テアリ・タリはどのような意味で使われていたのか、まず、平安朝前期のものとして古今和歌集・土左日記および参考として竹取物語・伊勢物語の用例を見、平安朝中期のものとして枕草子・源氏物語の用例を考察する⁽³⁾。

次に、それらの用例から平安朝のリ・テアリ・タリの用法の特徴について述べる。

一 平安朝のリ・テアリ・タリの用法

平安朝前期から中期の代表的な文芸作品の中のリ・テアリ・タリの用法

リ（ハアリ）には、

- 1、存在をあらわすもの
- 2、ある行動の結果、現在その場に在ることをあらわすもの
- 3、作用の結果、ある状態にあることをあらわすもの
- 4、動作の結果、ある状態にあることをあらわすもの
- 5、ある状態にて在ることをあらわすもの
- 6、存続をあらわすもの
- 7、状態をあらわすもの
- 8、確定

9、確述

がある。

タリには、

- 1、その場に在ることをあらわすもの
- 2、その場に存ることをあらわすもの
- 3、現在もそこに存ることをあらわすもの
- 4、事態があることをあらわすもの
- 5、継続をあらわすもの
- 6、存続をあらわすもの
- 7、状態をあらわすもの
- 8、状態性の語尾
- 9、存続をあらわすものと状態性の語尾であるものと
の中間のもの
- 10、確述

一・一 リ（ハアリ）

〔平安朝前期のリ〕

〔存在をあらわす〕

平安朝のリの意味を端的にあらわすものは、古今和歌集仮名序の
○…生きとし生けるもの、いづれか、歌を詠まざりける。

〔古今仮名序 新日本古典文学大系 四頁〕

の「生ける」であろう。源氏物語・竹河にも「生ける」

○いける世の死には心にまかせねば聞かでやまむ君が一言

〔源氏物語 竹河 新日本古典文学大系四 二七五頁〕

があり、これを同じく源氏物語・竹河の「生きたらむ」

○…あはれ、何を頼みにて生きたらむ。

〔源氏 竹河 四・二七一頁〕

と並べれば、その意は明確になる。「生きたらむ」は「生きていつたらよいのであろう。」で「この世に生きている」という継続形である。対して、「生ける（世）」は、「生きて在る（この世）」（新大系訳は「現世」という存在形になっている。古今和歌集仮名序「生きとし生けるもの」の「生ける」もまた、「この世に生きて在る」の意である。

この時代には、

○いたづらに日を経れば、人々、海を眺めつつぞある。

〔土佐 一月十五日 三〇頁〕

のような「あり」の用法があった。

○十六日。風波やまねば、なほ同じところに泊まれり。

〔土佐 一月十六日 三〇頁〕

の「泊まれり」もまた、「泊まっている」という存続を言うのではなく、「その場にとどまって、在る」という《存在》を言うものである。

古今集詞書に、

○法皇、西川におはしましたりける日、鶴洲に立てりと言ふ事を題にて、よませ給ひける 貫之

〔古今 十七・919 詞書〕

がある。この「立てる」は、「立つ」という動作ではなく、「立つてそこに存在している」ことをあらわし、「鶴洲に立てり」は、「今、鶴が洲に立つて在る」。この場合は「題」の提示であるが、次に挙げる「洲浜の景色」についても同じことが見てとれる。

○仙宮に、菊を分けて人の至れる形を、よめる 素性法師

〔古今 五・273 詞書〕

○菊の花の下にて、人の、人待てる形を、よめる 友則

〔古今 五・274 詞書〕

は、洲浜の形を見て詠んだものである。このような「る」も、その光景が洲浜の景色として眼前に存り、なお存在の意味が残っているものである。

竹取物語の、

○…白銀を根とし、黄金を茎とし、白き玉を実として立てる木

あり。

〔竹取 一一頁〕

伊勢物語の

○お(を)とこ、かの女のせしやうに、忍びて立てりて見れば、

：

〔伊勢 六三段〕

も、「立つ」という動作ではなく、「立つてそこに存在している」ことをあらわすために、リが用いられているものである。

以上のりは、「存在」をあらわす。

【ある行動の結果、現在その場に在る】

次に、

○人のもとにまかれりける夜、きりぐすの鳴きけるを聞きて、

よめる 藤原忠房 〔古今 四・196 詞書〕

は、「人のところを訪問していたときに、きりぎりすが鳴いた」と言う。作者が、「人の家に在った」ときのことである。すなわち、この「まかれりける」のりは、「ある所に人が行き、そこに在る」ことをあらわす。

○奈良の京にまかれりける時に、宿れりける所にて、よめる

坂上是則 〔古今 六・325 詞書〕

の「奈良の京にまかれりける」のりは、上と同じく、作者が「奈良の京に在る」ことを、「宿れりける」のりは、「宿に在る」ことを言う。

○初瀬に詣づるごとに宿りける人の家に、久しく宿らで、程経て後に至れりければ、… 貫之 〔古今 一・42 詞書〕

は「いつも泊まっていた家に至り、その家に滞在した」と言う。これも、「至れりければ」のりは「その家に在る」ことを言う。

○心地損なへりける頃、あひ知りて侍ける人の訪はで、心地を

(お)こたりて後訪へりければ、よみて、遣はしける 兵衛

〔古今 十五・789 詞書〕

の「訪へりければ」のりも、「あひ知りて侍ける人の家に在る」ことを言う。

このように、「まかる」「宿る」「至る」「訪ふ」など、ある場所に在って、何らかの行動をしたことを述べる際のりは、その場所に「在る」ことを言うものである。

以上のりは、「何らかの動作の結果、そこに在る」をあらわす。

【作用の結果、ある状態にある】

古今集詞書に、

○宗岳大頼が、越よりまうで来たりける時に、雪の降りけるを見て、己が思ひは、この雪のごとくなむ積れると言ひける折に、よめる 躬恒 「古今 十八・978 詞書」
がある。この「積れる」は、「雪は、今、積もつて存る」、そして、「わたくしの思ひは、まさにこの雪のごとくに積もつたある」ということである。

また、伊勢物語にも、

○富士の山を見れば、五月のつごもりに、雪いと白う降れり。

時知らぬ山は富士の嶺いつとてか鹿の子まだらに雪の降るらん 「伊勢 九段」

がある。今現在、雪が降っているならば、富士の山を見ることはできないので、この「降れり」は、萬葉集の、

立山の賦一首 短歌を并せたり

○立山に 降り置ける雪を（布里於家流由伎乎） 常夏に見れども飽かず 神からならし

「萬葉 十七・4001 家持」

「降り積もつた、その結果、今アル」にも見られたもの（拙稿「萬葉集のツ・ヌ・リ・テアリ・タリ・キ・ケリ」『京都語文』22号所収）と同じで、「雪が白く降り積もつて存る」と訳すことができる。これらの場合、「雪が積もる」「雪が降る」のは作用であるので、リは「何らかの作用の結果、ある状態にある」ことをあらわすものである。

さらに、伊勢物語には、状態性の語尾に近づいたりがある。

○昔の若人は、さるすける物思ひをなんしける。

「伊勢 四〇段」

「好く」は状態性の動詞であり、「すける」は「好色な」というのに等価な表現となる。この「る」は、状態性の語尾に近づいている。

○むかし、世心つける女、いかで心情あらむお（を） とこにあひ得てしがなと思へど 「伊勢 六三段」

の「る」も同じである。

【動作の結果、ある状態にある】

古今和歌集詞書、

○河原左大臣の、身まかりてのち、かの家にまかりてありけるに、塩釜と言ふ所の様を作れりけるを見て、よめる 貫之

「古今 十六・852 詞書」

の「塩釜と言ふ所の様を作れりけるを見て」は、「塩釜というところの景色を作ったあつたのを見て」で、リは「たある」で訳せるが、この場合は、「作った」、その結果が存在するものである。

○内侍のかみの、右大将藤原朝臣の四十賀しける時に、四季の絵書ける後の屏風に書きたりける歌 素性法師

「古今 七・357 詞書」

「四季の絵書ける」も同様、「書いたある」。これらは、庭の景色を作った結果の存在や、屏風の絵を書いた結果の存在をあらわす。

357歌には、そのあとの「後ろの屏風に書きたりける歌」にタリが用いられている。「書いてある」と現代語訳できるが、これは、

リが、「四季の絵」は動かぬものとして存在していることをあらわすのに対し、タリは、その上に書いたという動作を含んで、その結果が存続しているというもので、リに較べ、時間の短さをあらわすものである。

○二条后の、春宮の御息所と申ける時、御屏風に、竜田川にもみぢ流れたる形を書けりけるを題にて、よめる 素性

〔古今 五・293 詞書〕

「もみぢ流れたる形を書けりける」のタリは、「もみぢが流れている」という継続をあらわし、「書けりける」のりは、その絵が屏風に筆をとどめていることをあらわす。そして、それが以前のできごとであったからケリを用いている。

同様に、

○貞観御時、万葉集はいつ許作れるぞと、問はせ給ひければ、よみて、奉りける 文屋有季

〔古今 十八・997 詞書〕

もまた、昔に作られた万葉集が、今も残存するから、「作れる」のようにリを用いたものである。このように、「書かれた」「作られた」ものが、現在目の前にあることをあらわすのが、これらのリである。以上のリは、「何らかの動作の結果、ある状態にある」をあらわす。

【ある状態にて在る】

○滋賀の山越に、女の多く遭へりけるに、よみて、遣はしける 貫之

〔古今 二・115 詞書〕

は、「今、まさに、遭遇している人」の意で、現前の事実をあらわす。

○あひ知れりける人の、身まかりにける時に、よめる 壬生忠岑

〔古今 十六・835 詞書〕

は、「お互いに知っている人」の意で、「知る」という動作ではなく、時間的には存続、空間的には状態をあらわす。

上に掲げた

○心地損なへりける頃、あひ知りて侍ける人の訪はで、心地を（お）こたりて後訪へりければ、よみて、遣はしける 兵衛

〔古今 十五・789 詞書〕

の「心地損なへりける頃」は、「具合が悪い状態にあった」で、リは「ある状態にて在った」ことをあらわす。

【確述】

さて、平安朝のりのうち、もっとも特徴的な用法は、和歌の詞書の、

○旧年に春立ちける日、よめる

〔古今 一・1〕

のように、「よめる」で言っておさめられているものであろう。この「よめる」のように、連体形でおさめられているものには、

○歌たてまつれ、と仰せられし時、よみて、奉れる

〔古今 一・22〕

のように、動詞「奉る」に「リハアリ」の接したもの、

○弥生に閏月ありける年、よみける

〔古今 一・61〕

のように、ケリを用いた「よみける」の形のもの、なども存在する。連体形という活用形のうちに、

○仁和帝、親王におましくける時に、人に若菜賜ひける御歌

〔古今 一・21〕

○人の前栽に、菊に結び付けて植へ（ゑ）ける歌

〔古今五・268〕

などにある「御歌」や「歌」を含んでいるものである。⁽³⁾

これは、土左日記の、「よめる歌…とぞよめる」

○…よめる歌、

行く先に立つ白波の声よりもおくれて泣かむわれやま
さらむ

とぞよめる。 〔土佐 一月七日 一二頁～二三頁〕

とあるような散文形式より考案されたものである。このような形式は、土左日記の中には、

土左日記

よめりける…となむありければ〔一七頁〕
になひ出だせる歌…といひてありければ〔一九頁〕

よめりける…といふあひだに〔一九頁〕

いへる歌…となむよめる〔二三頁―二四頁〕

人のよめる…といひつつなむ〔二八頁〕

よめりける歌…とぞよめりける〔三四頁〕

歌をぞよめる。その歌…とぞいへる〔三七頁〕

書きて出だせる歌…とぞいへる〔四〇頁〕

よめる歌…とぞいへる〔四二頁〕

よめる…といへれば〔四四頁〕

よめる…となむいへる〔四四頁〕

よめる歌…といひて〔四六頁〕

よめる…といひつつぞ〔五一頁〕

いへりける歌…とぞいへる〔五五頁―五六頁〕

等々、さまざまなヴァリエーションであらわされている。古くは萬葉集九・1740に、「告りて語らく…と言ひければ（告而語久…登言家礼婆）」「言へらく…とそらくに堅めしことを（答久…常曾己良久尔 堅目師事乎）」があり、これらは漢文「曰」の訓読の「いはく…と」「いはく…といふ」を和文に応用したものである（あとの「答久」は「言へらく」と訓みならわしているが、一字一音例ではないので、確かではない）。

この場合、「よめる」「いへる」「出だせる」は、単に「よむ」「いふ」「出だす」動作を言うものではなく、その動作が行われ、その歌が今ここにあることをあらわすものである。これは、【動作の結果、ある状態にある】の「書ける」「作れる」などと同じものである。さらに、土左日記には、

○ある人のよめる歌、…（歌）…

また、ある人のいへる、…（歌）…

また、ある人、よめり。…（歌）…

京のうれしきあまりに、歌もあまりぞ多かる。〔五四頁〕

という箇所もある。「よめる歌、…いへる、…よめり。」と変化させ、歌を並べた最後を終止形の「よめり」で締めくくっているのは、散文ならではの叙述力である。⁽⁵⁾

こうしたものを下敷きに、「よめる」や「よみける」は成立した。八代集の中でも、古今和歌集に例が多いので、古今和歌集の撰者た

ちが詞書の書法として確立したものと考える。その上で、「よめる…とよめり」ではなく「…よめる」「…よみける」で成立した詞書の形の「ル」「(け)ル」には、確述の意がこめられることとなる。

現存をあらわしたアリが、動詞と融合して語尾リとなっていくと、もとの存在の意味はしだいに薄れ、リは形式的に確述をあらわすものになっていく。

〔平安朝中期のり〕

『枕草子』

○くすの木は、こだち多かる所にも、ことにまじらひたてらず

：

〔枕草子 三七段〕

「たつていないで」で、リ（ハアリ）は、そこに存在していることをあらわす。

だが、

○外にたてる人とうちにゐたる人と物いふが…

〔枕草子 七三段〕

この場合は、リとタリとに大差はない。

『源氏物語』

『存在』

○げにかやうなる人を見んにこそ、生けるかぎりの心ゆくべき
つまなれと思ながら、

〔源氏 匂宮 四・二二一頁〕

「生ける」は「生きて在る」である。

○籠れるほどの御物語り

〔源氏 若紫 一・一六一頁〕

「山に籠っていたころの話」で、リ（ハアリ）は「在る」。

○こよなく衰へたる宮仕へ人などの、巖の中尋ぬるが落ちとま
れるなどこそあれ

〔源氏 澤標 二・一〇七頁〕

「落ちとまれる」は「明石に居付いているといった者たち」で、リ（ハアリ）は「在る」。

○寒き洲崎に立てるかさゝぎの姿も、所からはいとお（を）か
しう見ゆるに

〔源氏 浮舟 五・二一八頁〕

「立てる」は「立つて在る」。

【その場に在る】

○うちの御使にてまい（ゐ）れり。

〔源氏 東屋 五・一二五頁〕

リ（ハアリ）は、「今その場に在る」ことをあらわす。

【その場に存る】

○落ちとまれる御指貫、帯など、つとめてたてまつれり。

〔源氏 紅葉賀 一・二六四頁〕

「落ちて、そこにとどまっている」で、リ（ハアリ）は存る。

○梅が枝をうそぶきて立ち寄るけはい（ひ）の、花よりもしる
くさとうち匂へれば、

〔源氏 竹河 四・二六〇頁〕

「梅が枝を口ずさんで立ち寄る気配が、その紅梅の香りよりも際立つてさつとおうので」。

○なごり匂へる移り香

〔源氏 東屋 五・一五一頁〕

「薫が帰った）あとまで匂う移り香」。

【動作の結果、ある状態にある】

○いかさまにむかし結べるちぎりにてこの世にかゝる中のへだてぞ
〔源氏 紅葉賀 一・二五二頁〕

「むかし結べるちぎり」は「前世での宿縁」。結んだのは昔であるが、その契りが今に続いている。

○えまい（ゐ）らぬよしのかしこまり申給へり

〔源氏 椎本 四・三四〇頁〕

「申給へり」は、「言上してきている」。

【作用の結果、ある状態にある】

○月曇りなく澄みまさりて、薄雪すこし降れる庭のえならぬに

〔源氏 初音 二・三八九頁〕

月が澄みきっているので、この場合の「降れる」は、降り積もっていること。

○同じ御垣の内ながら、変はれる事多くかなし。

〔源氏 賢木 一・三三七頁〕

【存続】

○ときときによれる句ひの定まれるに、消たれんもあいなしと

おぼして、

〔源氏 梅枝 三・一五六頁〕

「定まってある」。

○過ぎにし年、五節などとまれりしが、さうぐしかりし積もり

〔源氏 少女 二・三〇九頁〕

五節などが停止になった。「止まってあった」で、リ（ハアリ）は止

まることの確定となる。

○かの片はし心知れる御目には

〔源氏 若菜下 三・三一頁〕

○むかしの心知れる人なるべし
〔源氏 早蕨 五・二〇頁〕

「知っている」。

○お（を）かしきさまに、琴笛の道はとを（ほ）う弓をなんいとよくひける。
〔源氏 東屋 五・二二五頁〕

「弓を上手に引いている」。この場合には、常陸介の性格を言いあらわす。

○いとあはれにさびしく荒れまどへるに、松の雪のみ暖たかげに降りつめる、山里の心ちしてものあはれなるを

〔源氏 末摘花 一・二二六頁〕

（「荒れまどへる」は「荒れまどった状態にある」、「降りつめる」は「降り積もつてある」。

○寒しと思へるけしき深うて
〔源氏 末摘花 一・二二七頁〕

「思つてある」。このようなりは、状態にちかづく。

○年積もれるかしこき者ども
〔源氏 少女 二・三二頁〕

「積もつてある」こちらは「年」であるので、積もっていることは目に見えることではなく、リは状態をあらわすことばとなっていく。

○冬の夜の澄める月に雪の光りあひたる空

〔源氏 朝顔 二・二六八頁〕

「冬の夜の澄んだ月に雪が光りあっている空」。「澄める月」のり（ハアリ）は澄んで存る、ということ、で、「光りあひたる」のタリは

継続をあらわす。リ（ハアリ）が動かないものとしてあるのに対し、タリはいつとことのこと。

このようなり（て存る）は、状態をあらわすもの、さらには、状態性語尾に近づいていく。

【状態】

○いとあはれにさびしく荒れまどへるに、松の雪のみ暖たかげに降りつめる、山里の心ちしてものあはれなるを

〔源氏 末摘花 一・二二六頁〕

「荒れまどへる」は「荒れまどった状態にある」、「降りつめる」は「降り積もつてある」

○高きをも下れるをも、人の心ばへを見たまふに

〔源氏 蓬生 二・一三八頁〕

「身分の高下を問わず」。この場合、リの接していない「高き」と接している「下れる」とが対比されている。〈形容詞（状態）とへ動詞＋リ〉との対比である。

○かならずまつりごとのなを（ほ）くゆがめるにもより侍らず。

〔源氏 薄雲 二・二二六頁〕

「正しいとか間違っているとか」の場合も同じ。

○老いしらへるども

〔源氏 明石 二・八九頁〕

「老いばれた」。状態性のことばである「老いしらふ」にリが接した「老いしらへる」になると、リ（ハアリ）は状態性の語尾に近づいている。

○うせ給ひにし御息所の御かたちに似たまへる人

状態性の動詞「似る」（＋たまふ）に接した「る」は、状態性語尾に近づく。

○にばめる紙

〔源氏 葵 一・三一六頁〕

「にばむ」は状態性の動詞。リ（ハアリ）は状態性語尾に近づく。

【確定】

○飾りとする定まれるやうある物を難なくし出づる事

〔源氏 帚木 一・四四頁〕

「定まれるやう」は「一定の様式」。

○親のおきてにたがへりと思ひ嘆きて

〔源氏 帚木 一・七一頁〕

「たがへり」は「さからっている」。

○限れる事もなかりし御旅居

〔源氏 関屋 二・一五九頁〕

「限れる」は「期限の定まっている」。

○さるは、それはいまはじめてさまあしかるべきほどにもあらず、もとよりのたよりにもよれるを

〔源氏 浮舟 五・二四〇頁〕

「もとのたよりにもよれるを」は「昔からの縁によるものだが」。以上のりは、ことがらがある状態に確定することをあらわす。

一・二 テアリ

古今和歌集詞書にテアリの用例が2例ある。

○河原左大臣の、身まかりてのち、かの家にまかりてありける

に、塩釜と言ふ所の様を作れりけるを見て、よめる 貫之

〔古今 十六・852 詞書〕

○朱雀院帝、布引の滝御覽せむとて、文月の七日の日、おはしましてありける時に、侍ふ人ぐに、歌よませ給けるに、よめる 橘長盛

〔古今 十七・927 詞書〕

の2例である。同じく古今和歌集に、

○人のもとにまかれりける夜、きりぐすの鳴きけるを聞きて、よめる 藤原忠房

〔古今 四・196 詞書〕

○朱雀院の、奈良におはしましたりける時に、手向山にて、よみける 菅原朝臣

〔古今 九・420 詞書〕

がある。852の「まかりてありける」と196の「まかれりける」、927の「おはしましてありける」と420の「おはしましたる」、の間に違いはないように見える。しかしながら、枕草子、

○：萩の、露ながらおし折たるに、付けてあれど、えさしいでず。

〔枕草子 三三段〕

○「遠江の浜柳」といひかはしてあるに、：

〔枕草子 四六段〕

源氏物語、

○藤はこなたのつまにあたりてありければ、御格子ども上げわたして、人く出であたり。〔源氏 花宴 一・二八二頁〕

○：世に落ちあぶれてあるやうに、人のまねび侍しかな。

〔源氏 手習 五・三八五頁〕

では、「アリ」は実質的な存在の意味で用いられている。わずかに、○猶あやしと思し人のことに、似ても有ける人のありさまかな。

〔源氏 手習 五・三八四頁〕

のように、「似たり」を強調するために「モ」を挿入するような場合に、「アリ」にもどっている。古今和歌集の852「まかりてありけるに」、927「おはしましてありけるに」も、「アリ」は実質的な存在の意味の動詞（存在詞）と考えるべきであろう。すなわち、「その場に居る」の意である。

土左日記には、

○いたづらに日を経れば、人々、海を眺めつつぞある。〔三十頁〕

○黒鳥といふ鳥、岩の上に集まり居り。〔三十五頁〕

のような「過ごしている」「その場に居る」の意の「あり」「居り」はあるが、テアリの例はない。

竹取物語に、

○生きてあらむかぎりはかくありて、蓬萊の山といふらむ山に遭ふと：〔竹取 一九頁〕

「生きてあらむかぎり」の例がある。これは、「生きているかぎり」で、リの始めに挙げたタリの用例、

○：あはれ、何を頼みにて生きたらむ。

〔源氏 竹河 四・二七一頁〕

の意味に通じる。

伊勢物語には、

○尼になりて、山に入りてぞありける。〔伊勢 六〇段〕

○今まで、巻きて文箱に入れてありとなんいふなる。

〔伊勢 百七段〕

がある。六十段は山寺に籠つて「過ごした」ことを言い、テはアリを限定する助詞である。また、百七段は文箱に入れて大切に「保存している」ことを言い、これもテはアリを限定する助詞である。

枕草子の中にも、

○ある女房の、遠江の子なる人を語らひてあるが、同じ宮人になむしのびて語らふときゝて怨みければ、「親などもかけて誓はせ給へ。いみじきそらごとなり。夢にだに見ず」となんいふは、いかゞいふべき、といひしに、…

〔枕草子 二九六段〕

がある。これは、伊勢物語の、

○昔、いと若きお（を）とこ、若き女をあひ言へりけり。

〔伊勢 八六段〕

○昔、お（を）とこ、宮仕へしける女の方に、御達なりける人をあひ知りたりける、ほどもなくかれにけり。

〔伊勢 一九段〕

などのリ・タリの用法と似ているように見える。しかし、伊勢物語の例は「女と親しくしていた」というのであり、枕草子の例は、「女房が遠江守の息子と親しい」ことは話の前提の内容である。そこで「そういうことがある」の意味でアリを使ったものである。

*後撰和歌集に

○前中宮宣旨、贈太政大臣の家よりまかりいでてあるに、

かの家に、「事にふれて日暗し」といふ事なん侍ける

宣旨 〔後撰 十六・1127 詞書〕

がある。この「ある」は実質的な「在り」、「て」はアリを限定する助詞である。

金葉和歌集に、

○たゞならぬ人の、もて隠してありけるに子を産みてけるがもとより、熟みたる梅をおこせたりければよめる

読人不知

〔金葉 九 577 詞書〕

○律師長済みまかりてのち、母のその扱ひをしてありける夜、夢に見えける歌

〔金葉 十 615 詞書〕

がある。これらも「あり」は実質的な「在り」、「て」はアリを限定する助詞である。

古今和歌集の2例と合わせ、八代集のテアリの例は、計5例である。

後撰和歌集・拾遺和歌集・後拾遺和歌集の詞書には、

○あひ知りて侍ける男のひさしうとはず侍ければ、なが月ばかりにつけはしける 右近 〔後撰 七・423 詞書〕

のように、「テハベリ」の形が多用されている。古今和歌集では、わずか8例であるのに対し、後撰和歌集では146例見られる表現である。これは、源氏物語にも、

○いとたう（ふ）とき老僧のあひ知りて侍に、言ひ語らひつけ侍める 〔源氏 夕顔 一・131頁〕

など、会話文の中に用いられる表現である。後撰和歌集・拾遺和歌集・後拾遺和歌集の詞書が語りの性格をもっていることに拠るのであるが、このように、書き言葉でリ・テアリ・タリにあたるものを、話し言葉では、丁寧に表示してテハベリとすることがあった。

一・三 タリ

枕草子に、

○殿上より、梅の花散りたる枝を、「これはいかか」と言ひたるに、ただ、「早く落ちにけり」といらへたれば、その詩を誦じて、殿上人黒戸にいとおほくゐたる、上の御前に聞しめして、「よろしき歌などよみて出だしたらむよりは、かかる事はまさりたりかし。よくいらへたる」と仰せられき。

「枕草子 百一段」

があり、小学館新編日本古典文学全集の訳では、

○殿上の間から、梅の花が散つた枝を持ってきた。「これはどのように御覧になりますか」と言つた時に、わたしがただ「早く落ちにけり」と応じたところ、その詩を吟じて、殿上人が黒戸にとてもたぐさん座つていたのを、主上がお聞きあそばして、「並一通りの歌などを詠んで出すのに比べると、こういうことはずっとすぐれていることだな。うまく応答したことだ」と仰せになった。

としている。タリの訳がそれぞれに違っているのであるが、

「散りたる」は、散っているあり様を、

「言ひたる」「いらへたれ」は、「言う」「答える」という動作が

為されてあるということを、

「ゐたる」は、「座る」という行為が継続していることを、

「出だしたらむ」は、「出す」という動作が為されてあるということを、

「まさりたり」は、まさっているという状態を、

「いらへたる」は、「答える」という動作がなされてあるということを、

あらわして、どれも、目の前に、その動作・状態が持続しているものである。

このように、タリの本質は《持続》ということである。さる。

枕草子の、

○忍びたる郭公の、遠くそらねかとおぼゆるばかり、たどしきを聞つけたらんは、何心ちかせん。〔枕草子 二段〕

「聞きつけたらん」は、「ききつけたならば」。ここで、現代語で「た」という語になることに注意される。

○まい(ゐ)りたれば、はじめ下りける人、もの見えぬべき端に八人ばかりゐにけり。一尺よ、二尺ばかりの、長押のうへにおはします。「こゝにたちかくしてゐてまい(ゐ)りたり」と申給へば、「いづら」とてみき丁のこなたにいでさせ給へり。

「枕草子 二五九段」

には、「参りたり」が2例ある。はじめの「まいりたれば」は「参上すると」、あとの「まいりたり」は「参上いたしました」と現代語訳

することになる。

これらのように現代語で「た」と訳せるものを、現代文法では、一般に《完了》ととらえている。リ・タリ・ツ・ヌ・キ・ケリはやがてタリに吸収され、タとなるのであるが、さらに近世には、「ている」「てある」「てしまう」などのように、分析的な語を付け加えることで違いをあらわすことも起きてくる。そのため、タリの訳にも「た」のような形が出てくるのであるが、そのような「た」を完了と説明しているのである。

しかしこれは、事態が完了したということではなく、ある動作・作用が行われ、そこに事態の結果が存在しているということである。なお、それを現代では《存続》と名付けてもいるのであるが、これも、動作や作用の存続だけが意識されてきている。動作をおこなったヒトや、そこでやり取りされたモノがそこに残るものについては、ほとんど触れられないのが現状である。

いまの「聞きつけたらん」は「聞いた」という経験をもっていることをあらわし、「参りたり」の場合にも、参上した人がそこに在ることを言っている。古今和歌集の、

○橘清樹が忍びにあひ知れりける女のもとより、遣せたりける
よみ人しらず
〔古今 十三・654 詞書〕

の場合も、手紙をよこし、それが今男のもとに存ることを、タリであらわしているのである。

これらを現代語で「た」と訳すために、動作が完了してしまったものや、過去のできごととの違いが不明確になってしまうのである。

〔平安朝前期のタリ〕

【その場に在る】

来たり

○桜の花の咲けりけるを見にまうで来たりける人に、よみて、

贈りける 躬恒

〔古今 一・67 詞書〕

の「咲けりける」は「咲いて存る」ことをあらわす。「まうで来たり」は、「こちらに来て、今、ここに居る」ことをあらわす。花の咲いている時間と、人が来ている時間との、時間の長さの違いがりとタリとにあらわれている。

「来」と「たり」との接続した例は、古今和歌集では、ほかに「まうで来たり」が3例、合わせて4例ある（十七・880、十七・900、十八・978）。

*十七・900歌に、「母皇女のもとより、とみの事とて、文を持てまうできたり」と、「たり」が終止形である例がある。これら4例は、「来」と「たり」との二語である。

漢文訓読語に、「来たる」という語があるが、これは「来至る」が熟合したもので、終止形は「キタル」である。

遣せたり

○隣より、常夏の花を乞いに遣せたりければ、惜しみて、この歌を、よみて、遣はしける 躬恒

〔古今 三・167 詞書〕

は、「隣より常夏の花をもらいに使いをよこしたので、惜しんで、こ

の歌を詠んで、返したものの。「遣せたりければ」のタリは、使いが来ていることをあらわす。

召したり

○雷壺に召したりける日、大御酒など賜べて、雨のいたう降りければ、夕さりまで侍てまかり出でける折に、さか月を取りて 貫之

「召したりける」の「召す」は、(醍醐)天皇がお召しになったことを言う。「たり」は、召されて、その場に居合わせることを指す。
詣でたり

○山寺に詣でたりけるに、よめる 貫之

〔古今 二・117 詞書〕

は、「山寺に詣でた時に、詠む歌」。「たり」は、山寺に居ることをあらわす。

まかりたり

○ものへまかりたりけるに、人の家に女郎花植へ(ゑ)たりけるを見て、よめる 兼覧王

〔古今 四・237 詞書〕

「まかりたりける」は、出かけて行つて、今はその場所に在ることをあらわす。

「植へ(ゑ)たりける」は「植えてある」で、女郎花を植えて、今そこに植わっていることをあらわす。これは存続である。

おはしましたり

○朱雀院の、奈良におはしましたりける時に、手向山にて、よみける 菅原朝臣

〔古今 九・420 詞書〕

「奈良におはしましたりける」は、朱雀院が「奈良にいらつしやつ

ていた」。「たり」は、この歌の詠まれた時に、奈良に居ることをあらわす。その際に、菅原朝臣が手向山で歌を詠んだものである。

行きたり

竹取物語に、

○天竺に二つとなき鉢を、百千万里の程行きたりとも、いかでか取るべき

〔竹取 一三頁〕

「行きたり」の例がある。これは、百千万里という遠くに行つて、その場に居ることをあらわす。

あひたり

伊勢物語に、

○物心ほそく、すゞろなるめを見ることと思ふに、修行者あひたり。

〔伊勢 九段〕

「修行者と出合った」。タリは、今顔を合わせていることを示す。

【その場に存る】

遣せたり

○橘清樹が忍びにあひ知れりける女のもとより、遣せたりけるよみ人しらず

〔古今 十三・654 詞書〕

「遣せたりける」の「たり」は、手紙をよこして、それが今、手元にあることをあらわす。「あひ知れりける」の時間の長さ比べ、手紙の手元にある時間は短い。

○右大臣、住まずなりにければ、かの昔遣せたりける文どもを

取り集めて、返すとて、よみて、贈りける 典侍藤原因香

朝臣 〔古今 十四・736 詞書〕

この場合の「遣せたりける」は、以前に何通かの手紙を何度かによこした。タリは、それらが手元にあることをあらわす。

入れたリ

○河原大臣の、身まかりての秋、かの家のほとりをまかりけるに、もみじの色、まだ深くもならざりけるを見て、かの家に、よみて、入れたりける 近院右大臣

〔古今 十六・848 詞書〕

「入れたりける」の「たり」は、「入れた」結果、歌（手紙）がそこにあることを言う。

奉りたり

○寛平御時に、殿上の侍に侍ける男ども、瓶を持たせて、后宮の御方に、大御酒の下しと聞こえに奉りたりけるを、：

敏行朝臣 〔古今 十七・874 詞書〕

「奉りたりける」は、「瓶をお差出し申し上げた」で、「たり」は瓶がそこにあることをあらわす。

着せたり

○方違へに、人の家にまかれりける時に、主の、衣を着せたりけるを、朝に返すとて、よみける 紀友則

〔古今 十七・876 詞書〕

は、「方違えに知人の家に行っていた時に、主が、衣を着せかけてくれたのを、朝になって返そうとして、詠んだ歌」で、「たり」は、衣が、夜から朝まで身にかけていることをあらわす。「である」。

捕へたり・取りたり・にぎりたり

竹取物語にも、

○竜を捕へたらしましかば、又こともなく、我は害せられなまし。

〔竹取 四頁〕

○子安の貝、取りたるか

〔竹取 四三頁〕

○われ、物にぎりたり。

〔竹取 四七頁〕

のように、「手の中に存る」というタリがある。

〔現在もそこに存る〕

○久方の なかに生ひたる 里なれば 光のみぞ 頼むべらなる

〔古今 十八・968〕

「生ひたる」は「生まれて、現在もそこに存る」ことをあらわす。

竹取物語にも、

○家にすこし残りたりける物どもは、竜の玉を取らぬ者どもに賜びつ。

〔竹取 四一頁〕

の例がある。

〔継続〕

動作の継続

○貞保親王の、后宮の五十賀奉りける御屏風に、桜の花の散る下に、人の花見たる形書けるを、よめる 藤原興風

〔古今 七・351 詞書〕

これは、花を見るという動作が継続していることをあらわす。

山寺に詣でたりけるに、よめる 貫之

○宿りして 春の山辺に ねたる夜は 夢の内にも 花ぞちりける

〔古今 二・117〕

夢を見ているのであるから、「ねたる」は寝ることの継続。

作用の継続

○二条后の、春宮の御息所と申ける時、御屏風に、竜田河にも
みぢ流れたる形を書けりけるを題にて、よめる 素性

〔古今 五・293 詞書〕

これは、水が流れるという作用にしたがつて、もみじが流れること
の継続をあらわす。今、進行中である。

【存続】

動作の結果が存続

○商人の、良き衣を着たらむがごとし。

〔古今 仮名序 一四頁〕

は、「着る」動作の結果が存続していることをあらわす。「ている」。

○そこらの黄金給て、身をかへたるがごと成にたり。

〔竹取 七〇頁〕

は、身をかえた結果が存続していることをあらわす。

行為が行われたその結果が存続

○葛城王を、陸奥へ遣はしたりけるに、… 〔仮名序 六頁〕

の「遣はしたりける」は「遣はす」という行為が行われたその結果
が存続していることをあらわす。

○これより前の歌を集めてなむ、万葉集と名付けられたりける。

〔古今 仮名序 一二頁〕

の「名付けられたりける」は「名付ける」という行為が行われたこ
とを受け、その結果が存続していることをあらわす。

○…となむ言ひ伝へたる よみ人しらず

〔古今 十八・994 左注〕

この「たる」は、この歌にまつわる伝説が、往時より今に言い伝え
られ続けていることをあらわす。

竹取物語の中に、

○かねて、事みな仰たりければ、その時ひとつの宝なりける鍛
冶工匠六人を召しとりて… 〔竹取 一五頁〕

があり、これは、蓬萊の玉の枝を作るよう、鍛冶工匠に命じて、そ
の結果が存続していることをあらわす。また、

○翁、しえたり

〔竹取 四七頁〕

の場合は、「倉津麻呂（翁）よ、やってのけたぞ。」で、子安貝を取
ることをとうとう成し遂げ、今現在その結果を手に行っていることを
いうもので、これも行為が行われたその結果が存続している例であ
る。

作用の結果が存続

伊勢物語に、

○朝より曇りて、昼晴れたり。雪いと白う木のすゑに降りたり。

〔伊勢 六七段〕

がある。この場合には、今は晴れているのであるから、「雪…降りた
り」は降り積もっていることをあらわす。「雪が降る」は作用である
ので、タリは作用の結果が存続していることをあらわす。また、伊

勢物語に、

○富士の山を見れば、五月のつごもりに、雪いと白う降りたり。

時知らぬ山は富士の嶺いつとてか鹿の子まだらに雪の降

るらん

〔伊勢 九段〕

がある。この場合には、「雪が白く降り積もつてある」で、リは「何らかの作用の結果、ある状態にある」ことをあらわすのであるが、今の場合には、「作用の結果の存続」である。

ある事態が達成され、その結果が存続

○花薄、穂に出だすべき事にも有らず成りにたり。

〔古今 仮名序 九頁〕

「成りにたり」は、ある事態が達成され（二）、その結果が存続していることをあらわす。「（てしまつ）ている」。

○式部卿親王、閑院五皇女に住みわたりけるを、いくばくもあらで、女皇女の、身まかりにける時に、かの皇女の住みける帳の帷子の紐に、文を結び付けたりけるを、取りて見れば、昔の手にて、この歌をなむ書きつけたたりける よみ人しらず

〔古今 十六・857 詞書〕

「文を結び付けたりける」の「たり」は、「結び付け」である。「書きつけたりける」の「たり」は、「書きつけ」である。これらは、拙稿『萬葉集のツ・ヌ・リ・テアリ・タリ・キ・ケリ』（上掲）にも挙げた

◇人の国よりおこせたる文の物なき。

〔枕草子 二二段〕

の「贈つてくれた、そして今日の前にある」と同じ意のタリである。保持

○近江のや 鏡の山に たてたれば かねてぞ見ゆる 君が千年は

〔古今 二十・1086〕

これは今上の御嘗の、近江の歌

鏡を立てるといふ行為の結果を保持している。「てある」。

今に続く

○：伊勢の海人も 舟ながしたる 心地して 寄らん方なく

かなしきに… 〔古今 十九・1006〕

「舟ながしたる」は、「舟を流してしまつて、今も失っている」状態。あるできごとが起こつて、その状態が今に続いていることをあらわす。

【状態】

○奈良へまかりける時に、荒れたる家に、女の、琴弾きけるを聞きて、よみて、入れたりける 良岑宗貞

〔古今 十八・985 詞書〕

○焼けたる茅の葉に文を挿して 小町姉

〔古今 十五・790 詞書〕

○雲もなく なぎたる朝の 我なれや いとはれてのみ よをばへぬらん

〔古今 十五・753〕

「荒れたる」「焼けたる」「風ぎたる」は、状態をあらわす。

○：西の方に差せりける枝ののみぢ始めたりけるを、殿上に侍ふ男どものよみけるついでに、よめる 藤原勝臣

〔古今 五・255〕

これは、色が変わり始めるという作用が起こっている状態をあらわす。

【状態性の語尾】

一方、「優る」「似る」などの状態性の動詞に接するタリ

○優れたる人も、呉竹の、世々に聞え、片糸の、より／＼に絶えずぞ有りける。

○好き女の、悩める所有るに似たり。

〔古今 仮名序 一二頁〕

「優れたる」「似たり」は、まったく状態性の語尾となっている。竹取物語に、

○御心ざしまさりたり：

〔竹取 一〇頁〕

○年月を経て物し給事、きはまりたるかしこまり

〔竹取 一〇頁〕

伊勢物語に、

○その里に、いとなまめいたる女はらから住みけり。

〔伊勢 一段〕

のような例がある。

【存続をあらわすものと状態性の語尾であるものとの中間のもの】
存続をあらわすものと状態性の語尾であるものとの中間にあるものが、

○この歌は、隠れたる所なむ無き。

〔古今 仮名序 八頁〕

○（この歌は）：少し、様を変へたるなるべし。

〔古今 仮名序 八頁〕

古歌に加へて奉れる長歌 壬生忠岑

○君が世に 相坂山の 岩清水 木隠れたりと 思ける哉

〔古今 十九・1004〕

などである。主語の性質・性格などというもので、存続の意味を残しつつ、状態性の意味に近づいている。

上記のようにさまざまな様相を見せるタリが、一つの歌ないし一つの詞書、一つの文の中で同居するものを掲げる。

◇存続と継続とが同居するもの

○人の家に植へ（ゑ）たりける桜の花、咲き初めたりけるを見て、よめる 貫之

〔古今 一・49 詞書〕

「植へ（ゑ）たりける」は「植える」という動作が行われ、その桜が今も植わっていることをあらわす。これは存続である。「咲き初めたりける」は「咲く」という動作が行われ、それが続いていることをあらわす。これは継続である。

また、左注に、

○この歌は、昔、仲麿を、唐土に物習はしに遣はしたりけるに、数多の年を経て、え帰りまうで来ざりけるを、…。

：夜に成りて、月のいと面白くさし出でたりけるを見て、よめるとなむ語り伝ふる

〔古今 九・406 左注〕

と、タリが並んでいるものがある。「遣はしたりける」の「たり」は、仲麿を学問を学ぶために遣わし、その状態が続いていることをあらわす。「さし出でたりける」の「たり」は、美しく月が出ていることをあらわす。こちらは作用の継続である。

◇掛詞

○たぎつ瀬に 根ざしとゞめぬ 浮草の うきたる恋も 我はする哉

〔古今 十二・592〕

「浮草の うきたる」は「浮草が浮いている」という存続をあらわすが、「浮きたる恋」は「不安定な恋」ということで、「たる」は状態をあらわす。このように、掛詞では、ふたつの意味合いを兼ね備えることもある。

以上、古今和歌集のタリには、継続をあらわすもの、存続をあらわすもの、状態をあらわすもの、動作の結果がそこにあることをあらわすもの、などがある。

（古今和歌集では、

歌のタリには存続、継続、存続、状態をあらわす、状態性の語尾、の用例があり、

仮名序には存続の例と状態性の語尾のものとがあり、詞書には存続の例と、ある動作の結果ヒトやモノがその場に在ることをあらわす例があり、

左注には存続の例がある）

これは、後撰和歌集・拾遺和歌集・後拾遺和歌集・金葉和歌集・詞花和歌集・千載和歌集・新古今和歌集など八代集でも同様である。

存続に掲げた十八・九九四歌の左注

○…となむ言ひ伝へたる

よみ人しらず

〔古今 十八・九九四 左注〕

では、「となむ言ひ伝へたる」とタリを使って「今に言い伝えられてゐる」ことを示していた。が、九・四〇六歌の左注

○この歌は、…夜に成りて、月のいと面白くさし出でたりけるを見て、よめるとなむ語り伝ふる

〔古今 九・四〇六 左注〕

では、「…よめるとなむ語り伝ふる」（語り伝えている）と、動詞のみで「ている」の意味をあらわしている。動詞は、動作をあらわすこともあり、動作の継続をあらわすこともある。たとえば、「わたくしは歩く。」と言う時、「歩く」という動作について言うこともあれば、「今、歩いている」という継続を言うこともある。これは動詞のもつ時間性に因る。しかして、タリは動詞の中に含むこともできるし、また、タリを顕在化して継続や存続をはっきりさせることもできる、という性格のものであった、ということができる。

このようなことから、タリは上記のようないろいろな意味に解し得る様相を見せながらも、動作・作用の持続という点で、同じひとつのものとして、捉えられていた、と考える。

【確述】

ところで、竹取物語の中に、

○それ、さも言はれたり

〔竹取 三〇頁〕

がある。これは、全体で、「それはまことにもつともなことです」の意となる。相手の言を肯定するときに、現代語で「言えている」と言うのと同趣である。「言えている」は、「当たっている」に近く、「ている」は状態性の語であるが、そこに確述の意が含まれる。同様に「さも言はれたり」のタリも状態性の語の一種で、確述である。

〔平安朝中期のタリ〕

『枕草子』

枕草子には、

○春は曙。やうく／＼しろくなり行、やまぎはすこしあかりて、むらさきだちたる雲のほそくたなびきたる。

〔枕草子 一段〕

をはじめとして、タリが多様されている。

【その場に在る】

○おはしましつきたれば…

〔枕草子 二五九段〕

これは「来たり」などと同じ、その場に在ることを言う。

○まいりたれば、はじめ下りける人、もの見えぬべき端に八人ばかりゐにけり。一尺よ、二尺ばかりの、長押のうへにおはします。「こゝにたちかくしてゐてまいりたり」と申給へば、「いづら」とてみき丁のこなたにいでさせ給へり。

〔枕草子 二五九段〕

「参りたれば」は「参上すると」、「まいりたり」は「参上いたしました」。タリは、今中宮の御前に在ることをあらわす。

○やんごとなき物持たせて人のもとにやりたるに、をそくかへる。

〔枕草子 六七段〕

人のもとにやって、そこに在る。

【事態がある】

○それに来たらん人は、十月廿日、一月、もしは一年も、まいて七八年ありて、思いでたらんは、いみじうお（を）かしておぼえて、…

〔枕草子 二七三段〕

「それに来たらん人」は「そんな明るい月の夜に来るような人」で、その場に在る。「思いでたらんは」は「昔のことを思い出す（思い出して会いに来る）ような場合は」で、事態があることをあらわす。

【継続】

○たゞなるよりはをかしう、すぎたるありさま、などいひあはせたり。

〔枕草子 一七四段〕

「すぎたる」のタリは状態をあらわし、「いひあはせたり」のタリは継続。

【存続】

○名取川、いかなる名を取たるならんと聞かまほし。

〔枕草子 五九段〕

「たる」は名を取り、それが今に続いているということをあらわす存続。

○忍びたる郭公の、遠くそらねかとおぼゆるばかり、たど／＼しきを聞つけたらんは、何心ちかせん。

〔枕草子 二段〕

「聞きつけたらん」は、「ききつけたならば」。「聞つけたり」は、ほととぎすの声を聞きつけ得た、という経験を得ているということ。これも存続のひとつ。

○よくたきしめたる薫物の、昨日、一昨日、今日などは、わすれたるに、ひきあけたるに、煙ののこりたるは、たゞいまの香よりもめでたし。

〔枕草子 二一四段〕

「たきしめたる」「わすれたる」のタリ、「ひきあけたる」「のこりたる」のタリはいずれも存続。

○御前の桜、露に色はまさらで、日などにあたりて、しばみわ

ろくなるだにくちをしきに、雨の、夜ふりたるつとめて、い
みじく無徳なり。

『枕草子 二五九段』

「雨の、夜ふりたるつとめて」は「夜雨の降った次の朝」。桜の様子
を言うためであるので、雨が降ったのは夜のことであるが、その名
残の残っている朝、ということで、タリは存続。

○女房のまいりまか出には、人の車を借るお（を）りもあるに、
いと心よういひて貸したるに、牛飼童、例のしもじよりも強
くいひて、いたうはしりうつも、あなうたてとおぼゆるに、

『枕草子 一本 二九段』

「貸したるに」は「貸してくれたのに」。車に乗っているときは、ま
だ借りている間であるので、「貸したる」のタリは存続。

○従者をして打たせさへしければ、ましていましめを（お）き
たるこそ。

『枕草子 一本 二九段』

「ましていましめおきたるこそ」は「まして厳しく注意してあつた
に違いない」で、タリは「である」。存続。

【状態】

○愛嬌おくれたる人の顔

『枕草子 三四段』

は状態

『源氏物語』

【その場に在る】

○たゞ我恋かなしむむすめのかへりおはしたるなめり

『源氏 手習 五・三二九頁』

「帰っておいでになった」で、タリは、娘がその場に在ることをあ

らわす。

○まい（ゐ）りたるにあひて、物語りするついでに

『源氏 若菜上 三・二一五頁』

「参上していた」で、タリは現在もその場に在ることをあらわす。

○おりしも、うれしくまであひたるを、いかにぞ、かの聞えし
ことは

『源氏 宿木 五・一一五頁』

「出会えた」で、今、その場に在ることをあらわす。

【その場に存る】

○さやうなる露ばかりのけしきにても漏りたらば、いとわづら
はしげなる世なれば

『源氏 蜻蛉 五・三〇六頁』

「そのような様子が、ほんの少しでも漏れて、人に気づかれたら」
で、タリは、漏れて世間に存ることを言う。

○うち泣きつゝ書きたる文を、あはれとは見給けれど

『源氏 東屋 五・一四〇頁』

「したためてある手紙」で、タリは、書いた手紙が目前に存るこ
とをあらわす。

○と書きたる手

『源氏 蜻蛉 五・三一二頁』

「書いたその筆跡」で、タリは、書いた歌（の筆跡）が目前に存
ることをあらわす。

○さし出でたる和琴を

『源氏 蜻蛉 五・三一五頁』

「さし出した和琴」で、タリは、和琴が目前にあることをあらわ
す。

○さやうの物のしたるわざか。

『源氏 手習 五・三二七頁』

「狐のようなものがした仕業」で、タリは仕業が目の前にあることをあらわす。

○大將殿より御文取り入れたる、ほのかに聞き給て、

〔源氏 夕霧 四・一一九頁〕

「大將殿からお手紙の届けられたことを」で、タリは、手紙が届けられ、今こちらに存することをあらわす。

○大輔がもとにも、いと心ぐるしげに言ひやりたりければ

〔源氏 東屋 五・一四〇頁〕

「言つてやつた」で、タリは、相手のところに手紙が届いていることをあらわす。

【事態がある】

○わがもてなしの、それにけがるべくありそめたらばこそあらめ

〔源氏 蜻蛉 五・二九三頁〕

「自分の扱いが、そのことで自分の汚点になるような形で始まったのであればこまりましょうが。」

○いま始めた事めきてやはおぼさるべき

〔源氏 総角 四・三九二頁〕

「今始まったばかりのお付き合い」。

○生まれたるいゑ（へ）のほど、を（お）きてのまゝにもてなしたらむなむ

〔源氏 惟本 四・三五二頁〕

「生まれたるいゑ（へ）」は、「生まれた家」（出自）。

【継続】

○障子一間ばかりぞあけたるを〔源氏 東屋 五・一五六頁〕
「障子があけてある」で、タリは、行為の結果が継続していることをあらわす。

○むかしおぼえたる御対面に〔源氏 若菜上 三・二五三頁〕
「昔を思い出さずにはいられぬこのご対面に」。今昔のことを思い出しているのでタリは継続。

○かゝる山里に住みはじめたりける也

〔源氏 手習 五・三三九頁〕

「山里に住みはじめた」で、タリは継続。

○生きたらじと思しづみ給へる〔源氏 玉鬘 二・三四一頁〕

○猶え生きたるまじき心ちなむし待を、

〔源氏 柏木 四・一三頁〕

○あはれ、何を頼みにて生きたらむ。

〔源氏 竹河 四・二七一頁〕

○生き出でたりとも、あやしき不用の人なり。

〔源氏 手習 五・三三一頁〕

○限りと見えながらも、かくて生きたるわざなりけり

〔源氏 手習 五・三三四頁〕

○あらぬ世に生まれたらん人

〔源氏 手習 五・三四六頁〕

生きている場合、タリは継続。
逆に亡くなった場合は、タリは、その状態が存続していることをあらわす。

○亡くなりたる人

〔源氏 手習 五・三二六頁〕

○死にたりける人

〔源氏 手習 五・三二六頁〕

【存続】

○けさひらけたる初花

〔源氏 賢木 一・三八五頁〕

は、「今朝開いた初花」で、現在も花が咲いている。動作の結果が存続している。

○深くこの事を心得たる人は〔源氏 若菜下 三・三四三頁〕

「深く音楽の道を心得ている人」で、タリは、存続。

○我をば人げなしと思ひ離れたるとな

〔源氏 紅梅 四・二四〇頁〕

「お見限りなのだね」。タリは行為の結果の存続。

○聞こえ違へたる文字かな

〔源氏 花宴 一・二七七頁〕

は「申しそこねました」。その言葉を使った結果が今も続いているということ、タリは、存続のひとつ。

○所の預り、いま加へたる家司などに仰せらる。

〔源氏 松風 二・二〇〇頁〕

「新しく加えた家司」で、加えて現在もその任にある。

○雨のうち降りたるなごりの、いとしめやかなるタつ方

〔源氏 胡蝶 二・四一四頁〕

雨のなごりがあるので、まだ雨の余韻が続いている。存続。

○おぼえぬ所にて聞きはじめたりしに

〔源氏 若菜下 三・三四三頁〕

「思いがけない所ではじめて聞いた」という経験を得ているで、タリは存続。

○いはせの森の呼子鳥めいたりし夜のことは残したりけり。

〔源氏 早蕨 五・八頁〕

「言い出さなかった（残しておいた）」で、タリは存続。

○いにしへより伝はりたりける宝物

〔源氏 宿木 五・二九頁〕

タリは、伝えるという行為が行われたその結果が存続していることをあらわす。

○近き世に花降らせたる匠も侍りけるを

〔源氏 宿木 五・八二頁〕

タリは、花を降らせるという行為が行われた、その言い伝えが現在にも続いていることをあらわす。存続。

○眉のけざやかなりたるも、うつくしうきよらなり。

〔源氏 末摘花 一・二三三頁〕

なども同じく存続で、「である」と訳すことができる。

○人の程、さゝやかにあえかになどはあらで、よき程になりあ

ひたるこゝちし給へるを

〔源氏 宿木 五・五一頁〕

「ほどよく成人していらしやる」で、タリは存続。

○絶えてを（お）とづれずなりにたり。

〔源氏 竹河 四・二七七頁〕

「訪ねてこなくなりました」。タリは存続。

○いまなん露の絆なくなりたるを

〔源氏 幻 四・一八九頁〕

○くちお（を）しく故姫君のおはしまさずなりにたるこそ飽か

ぬ事なれ

〔源氏 東屋 五・一四五頁〕

○思ひし事はやみにたり

〔源氏 東屋 五・一六八頁〕

など、「ニタリ」は、到達したこと（二）の結果が今も存続している

(タリ) ことをあらわす。

行為が行われたその結果が存続

○寺へ人やりたるほど、返り事書く

〔源氏 浮舟 五・二五六頁〕

「寺へ使いを出している間に」で、タリは存続。

以上のように、存続には、「なごり」「始む」「初む」「残す」「伝はる」「成る」などの言葉と共にある場合がある。

【状態】

○お(を)りふしにつけたる御いとなみ

〔源氏 若菜上 三・二六八頁〕

「お(を)りふしにつけたる」は「おりふしにつけての」。状態の一種。

○時につけたる題出だして、うそぶき誦じあへり。

〔源氏 総角 四・四三四頁〕

の場合は、「折にふさわしい詩の題」で、タリは状態の語尾に近づいている。

○時に合ひたるさまにて、

〔源氏 野分 三・四三頁〕

○ほどにつけたる願どもなどかつく果たしける。

〔源氏 濡標 二・一一六頁〕

は、状態。

○年ごろ経つる海づらにおぼえたれば、所かへたる心ちもせず。

〔源氏 松風 二・一九八頁〕

「おぼえたれば」は「似ている」で、タリは状態。「所かへたる心ち」も状態。

○ともかくもこの御こと定まりたらば

〔源氏 若菜上 三・二一五頁〕

(女三の宮の)の身の上が「定まったならば」。定まって落ち着いている、ということ、タリは状態。

○下りたる座に帰り着き給へる程、心ぐるしきまでぞ見えける

〔源氏 宿木 五・一〇七頁〕

「下座」で、タリは状態。

○ことさらめきたるまで

〔源氏 東屋 五・一五一頁〕

タリは状態。

二 リ(ハアリ)・テアリ・タリの意味

以上、平安朝前期から中期の代表的な文芸作品の中のリ・テアリ・タリの用法を見てきた。

リ(ハアリ)には、

- 1、存在をあらわすもの
- 2、ある行動の結果、現在その場に在ることをあらわすもの
- 3、作用の結果、ある状態にあることをあらわすもの
- 4、動作の結果、ある状態にあることをあらわすもの
- 5、ある状態にて在ることをあらわすもの
- 6、存続をあらわすもの
- 7、状態をあらわすもの

8、確定

9、確述

がある。1から5までの用法は、『存在』とくくることができる。

6の「存続をあらわすもの」、7の「状態をあらわすもの」は、源氏物語にあらわれる。3～5からしだいに存続・状態の意味を担うようになったものである。これは、タリに近づくものである。8・9はもともと抽象的なアリで、これは萬葉集にも見ることでできるものである。

テアリのアリは実質的な存在の意味の動詞（存在詞）と考える。すなわち、「その場に居る」の意である。

タリには、

- 1、その場に在ることをあらわすもの
- 2、その場に存ることをあらわすもの
- 3、現在もそこに存ることをあらわすもの
- 4、事態があることをあらわすもの
- 5、継続をあらわすもの
- 6、存続をあらわすもの
- 7、状態をあらわすもの
- 8、状態性の語尾

9、存続をあらわすものと状態性の語尾であるものとの中間のもの

もの

10、確述

がある。テアリの「存在」の意味をのこした1～3の用法もあるが、5～9を『持続』とくくることができる。4は7、10につながっていく。

リ（ハアリ）が実質的な存在の意味をなくし、しだいにタリにちかづいていく。しかし、

○花の木の盛りなるも、まだしきも、梢お（を）かしう霞

みわたれるに、かの御形見の紅梅に、鶯のはなやかに鳴き出でたれば、立ち出でて御覧す。〔源氏 幻 四・一九一頁〕

のような場合、リは長い時間にわたり、タリはいつとぎのことで、その存続の時間に差がある。

次に、枕草子にあった、

○外にたてる人とうちにあたる人と物いふが…

〔枕草子 七三段〕

のような例では、リ（ハアリ）とタリとは同じ意味へ継続で使われている。リ（ハアリ）が四段動詞・サ変動詞にしか接することがないという特殊な語であったことが、リ（ハアリ）をタリに近づけていったと考えられる。

源氏物語の、

○御寺のかたはら近き林に抜き出でたる筈、そのわたりの山に掘れる所などの、山里につけてはあはれなれば、たてまつれ給とて、御文こまやかなる端に、

春の野山、霞もたど／＼しけれど、心ざし深く掘り出でさせて侍るしばかりになむ。

〔源氏 横笛 四・四九頁〕

には、タリ・リ・テハベリが並んでいる。タリ・リには大差はない。タリ・リは地の文。テハベリについては、手紙の内容であるので、話し言葉になっており、また、自分の行為ではなく仕えている者に掘り出させたと言っているのではあるが、これも同じと見てよい。この場合には、タリ・リ・テハベリがまったく同じ意味へその場に存ゝで用いられているのである。

三 給へり

枕草子や源氏物語などでは、リが「給フ」に接したタマヘリの形のものが多くなる。これは、枕草子や源氏物語では、人間の実際の上下関係を反映することが多いためである。

①「…殿もすぐれたりと思したるを、言に出でては、何かは数への中には聞こえ給はむ。我に並び給へるこそ君はおほけ

なけれ、となむ戯れきこえ給。見たてまつるに、命延ぶる御ありさまどもを、またさるたぐひおはしましなむやとなむ思侍に、いづくか劣り給はむ。物は限りある物なれば、すぐれ給へりとて、頂をはなれたる光やおはする。たゞこれをすぐれたりとは聞こゆべきなめりかし」

②童べは、かたちすぐれたる四人
〔源氏 玉鬘 二・三五二頁〕

③大将も、声いとすぐれたまへる人にて、
〔源氏 若菜下 三・三三四頁〕

この「すぐれたり」のタリと「すぐれたまへり」のりとは同じで、状態をあらわす。「たまふ」に接するのはりである。

また、

○かの、又、人も聞かざりし御中のむつ物語りに、すこし語り出で給へりしことを、言ひ出でたりしに、まこととおぼし出づるに、いとわづらはしくおぼさる。

〔源氏 若菜下 三・三七五頁〕

「語り出で給へりしこと」は「源氏が紫の上に」少しばかりお話し申していたこと。「言ひ出でたりし」は「物の怪が」口にしていた（の）。「語り出給へり」は、りの【動作の結果、ある状態にある】に挙げた「書ける」「作れる」「よめる」などと同じものの、「言ひ出でたり」は、タ

リの【状態性の語】の一種で、【確述】をあらわすものである。この場合も、リとタリとは、同じ意味である。また、「たまふ」に接するのは、リである。

源氏物語に一例、

○いまなむかゝる人持たまへりけりと、みかどまでも聞こしめして、を（お）ろかにもあらざりける人を、宮にかしこまりきこえて隠しを（お）き給たりける、いと（ほ）しと思しける。

〔源氏 蜻蛉 五・二九五頁〕

「隠しを（お）き給たりける」の用例がある。この場合のタリは、「（隠し）テオク」という、動作がある一定の時間、持続することをあらわすことばである。

四 仮定——「たらむ」「たらば」「たりとも」

未然形タラ・終止形タリの中に、仮定の意味合いから、「た」と訳すことのできるものがある。

【タラ】

『竹取物語』

○竜の頸に、五色に光る玉あなり。それ取りて奉りたらむ人には、願はんことをかなへん

〔竹取 三二頁〕

○いづちもいづちも足の向きたらんかたへ往なむず

〔竹取 三四頁〕

○月の出でたらむ夜は、見おこせ給へ。

〔竹取 七二頁〕

○竜を捕へたらましかば、又こともなく、我は害せられなまし。

〔竹取 四〇頁〕
〔竹取 四二頁〕

『伊勢物語』

○その山は、こゝにたとへば、比叡の山を二十ばかり重ねあげたらんほどして

〔伊勢 九段〕

『土左日記』 ナシ

『古今和歌集』

○事の心を得たらむ人は

〔古今 仮名序 一七頁〕

歌ナシ 左注ナシ 詞書ナシ

『枕草子』

○さて、月のあかきはしも、過ぎにしかた行末まで、おもひ残さるゝこともなく、心もあくがれ、めでたくあはれる事、たぐひなくおぼゆ。それに來たらん人は、十日廿日、一月、もしは一年も、まいて七八年ありて、思いでたらんは、いみじうお（を）かしとおぼえて、

〔枕草子 二二三段〕

「來たらん」のタリは、その場に在ることをあらわす。「思いでたらん」のタリは事態があることをあらわす。「來たらん人」は「月の明るい夜に訪れるような人」、「思いでたらん」は「思い出してやって来るような場合」。この場合には、現代語訳は現在形である。

○おほかた、これは、世の中にお（を）かしきこと、人のめで

たしなどおもふべき名を選びいでて、歌などをも本草鳥虫を
もいひ出したらばこそ、

〔枕草子 跋文〕

「いひ出したらば」は、「書き記してあるのならば」であるが、「書き記してあつたのなら」と訳すこともできる。

○指貫のかたつかたは、軾のもとにふみいだしたるなど、道に
人あひたらば、お（を）かしと見つべし

〔枕草子 二八三段〕

「あひたら」のタリはその場に在ることをあらわす。が、
バが接することによって、「人あひたらば」は「道で、人
に出会つたら」と「た」を用いることになる。

『源氏物語』

○もはら顔かたちのすぐれたらん女の願ひもなし

〔源氏 東屋 五・一二九頁〕

「すぐれたらん」のタリは状態をあらわす。「顔かたちの
すぐれたらん女」は「容姿のすぐれているような女」。

○はかなき石のたゞずまひも、たゞ絵にかいたらむやうなり。

〔源氏 胡蝶 二・四〇一頁〕

「かいたらむ」のタリはその場に存ることをあらわす。
「絵にかいたらむやうなり」は「まるで絵にかいたかのよ
うである」。

○あないはけな、かゝる物を散らし給ひて、われならぬ人も見
つけたらましかば、とおぼすも、

〔源氏 若菜下 三・三八二頁〕

「見つけたらましかば」のタリは、経験で存続をあらわす。
「（ほかの人が）見つけでもしたら」。「見つけたとしたら」
と「た」で訳すこともできる。

○ましてこまかに見せたらば、心とまり給なんかし、

〔源氏 手習 五・三四五頁〕

「見せたらば」のタリは、行為が行われたその結果が存続
していることをあらわす。「もつとよく見せたならば」と
訳せる。

○心ばみたる方をすこし添へたらば、と見たまひながら：

〔源氏 夕顔 一・一一七頁〕

「添へたらば」のタリも、恋が行われたその結果が存続し
ていることをあらわす。「添えたならば」。

【タリ】

○いみじきあたをおににつくりたりとも、を（お）ろかに見捨
つまじき人の御ありさまなり。

〔源氏 浮舟 五・二五三頁〕

「つくりたりとも」のタリはその場に在ることをあらわす。
「恐ろしい仇敵を鬼の姿に作つたとしても」。

以上のように、仮定の場合、現代語では、「…だったな

らば、く「だろう」と訳すことができる。仮定の非現実性が、過去の非現実性とまじわるところに、このような表現が成立する。これは、日本語だけではなく、英語などにもみられる表現方法である。

五 動作が順次行われる

——「たるものならば」「たれば」「たれど」

已然形タレは確定で、事態があることをあらわす。これは、動作が順次行われることをあらわすとき、完了の意味につながる。また、連体形タルに「(もの)ならば」が続く場合にも(竹取の例)、動作が順次行われることをあらわす場合がある。

【タル】

『竹取物語』

○この女、もしたてまつりたるものならば、翁に爵を、などか賜はせざらん

〔竹取 五四頁〕

【タレ】

『竹取物語』

○船にあるお(を)のこども、国に告げたれども、国の司まうでとぶらふにも、え起きあがり給はで、船底に臥し給へり。

〔竹取 三九頁〕

○かゝるよしの返事を申たれば、聞き給て
〔竹取 四四頁〕
○御前にまい(ゐ)りたれば、中納言、額をあはせて向かひ給へり。
〔竹取 四四頁〕

『伊勢物語』

○そこばくのささげ物を木の枝につけて、堂の前に立てたれば、山もさらに堂の前に動きいでたるやうになむ見えける。

〔伊勢 七七段〕

『土左日記』

○かの国人、聞き知るまじく、思ほえたれども、言の心を、男文字にさまを書き出だして、このことは伝へたる人にいひ知らせければ、心をや聞き得たりけむ、いと思ひのほかになむ賞でける。

〔土佐 三四頁〕

『枕草子』

○筆紙など給はせられたれば、「九品蓮台の間には、下品といふとも」など、書てまゐらせられたれば、「無下に思ひ屈じにけり。いとわろし。いひとちめつる事は、さてこそあらめ」との給す。

〔枕草子 九七段〕

中宮が筆紙などをくださったこと、「九品蓮台…」の文字を書いたこと、中宮の批評が、時間の推移にしたがつて記されている。

○暁に格子妻戸をを(お)しあげたれば、嵐の、さと顔にしみたるこそ、いみじくをかしけれ。

〔枕草子 一八八段〕

格子妻戸を押し開けたこと、嵐の風が顔にしみることが、

時間の推移にしたがつて記されている。

『源氏物語』

○小君かしこに行きたれば、姉君待ちつけていみじくの給ふ。

〔源氏 空蟬 一・九三頁〕

「行きたれば」のタリは小君がその場に在ることをあらわす。「小君があらちらに行つてみると、姉君が待ちつけていて、きつく叱る」で、小君の行動ののちに姉の行動が描写されている。

○御粥などこなたにまい（ゐ）らせたれど、御覧しも入れず、日一日添ひあはして、よろづに見たてまつり嘆き給

〔源氏 若菜下 三・三五四頁〕

「まい（ゐ）らせたれど」のタリは御粥がその場に存ることをあらわす。御粥が運ばれてくるが、源氏がそれをご覧にならないという、できごとが時間の推移にしたがつて描写されている。

こうして持続をあらわしたタリは完了の意味に近づいていくこととなる。

結び

リ（ハアリ）は、もと存在をあらわす語尾であったが、

しだいに存続や状態をあらわす語ともなった。また、「在り」が実質的な意味から抽象的な判断の意味をもつに至り、リは確定や確述をあらわす語ともなる。

テアリはいまだ実質的な「在り」の意で用いられるものがわずかにあるが、熟合した形のタリが優勢になる。会話文および語りの性格をもった後撰和歌集・拾遺和歌集・後拾遺和歌集などの詞書では、現実の上下関係を反映して、書き言葉でリ・テアリ・タリにあたるものを、テハベリとすることがある。

タリは、持続をあらわす。

四段動詞・サ変動詞にしか接することのないリ（ハアリ）は、しだいにタリに近づき、継続の意味で用いられるようにもなった。また、補助動詞「給ふ」に接する際は、リ（アリ）を用いた。

「たらむ」「たらば」「たりとも」は仮定の意味を含み、現代語では「…だったならば、（くだろう）」と訳すこととなる。これは、仮定の非現実性が、過去の非現実性とまじわるところに生まれる表現である。

また、「たるものならば」「たれば」「たれど」は、動作が順次行われることをあらわすとき、ひとつひとつの動作

が完了したかのように考えられることがある。そこで、タリは完了の意味に近づいていく。

〈仮定〉〈動作が順次行われる〉を現代語に訳す際、「た」という語を用いることがあるが、その本来は、リは存在をあらわし、タリは持続をあらわすことにあつた。

注

- (1) 拙稿「リに就いて」(『佛教大學研究紀要』通巻六十四號 1980年 3月)、「記紀風土記のツ・ヌ・リ・タリ・キ・ケリ」(『京都語文』第21号 所収 2014年11月)、「萬葉集のツ・ヌ・リ・テアリ・タリ・キ・ケリ」(『京都語文』第22号 所収 2015年11月)、「上代の動詞語尾ス」(『京都語文』第24号 所収 2016年11月)
- (2) 拙稿「上代の敬語(一)」(『京都語文』第14号 所収 2007年11月)、拙著『日本語のなりたち―歴史と構造―』(2003年11月 ミネルヴァ書房)
- (3) 平安朝の和歌集の歌にも、時期による用法の変化は考えられる。ただ、八代集は、それぞれの歌集の撰進された時期がほぼわかっており、また、歌集の詞書は、各歌集ごとに、語法にまつた特徴があるため、撰者の語感が反映されている、と考えることができる。土左日記は、一人の作者(紀貫之)によって書かれたものであると考えられるので、そこに用いられていることばの意味を均質的に考えることが可能である。竹取物語や伊勢物語は、成立年代に諸説あり(平安前

期(平安中期)、また、成立までに幾人かの手を経ているようであるので、成立年代のわかつているものと同列に考えることはできない。そのため、竹取物語・伊勢物語は平安前期の補いとして扱う。

(4) 古今和歌集五・268は、在原業平朝臣の歌として

植へ(ゑ)しうへ(ゑ)ば秋なき時やさかざらむ花こそちらめ根さへかれめや
を載せる。詞書の「植(ゑ)ける歌」とは、面白い表現である。伊勢物語五一段には、

昔、お(を)とこ、人の前裁に菊うへ(ゑ)けるに、
植へ(ゑ)し植へ(ゑ)ば秋なき時や咲かざらん
花こそ散らめ根さへ枯れめや

とある。

(5) 伊勢物語が成立した時期は不明であるが、このような和歌の叙述のしかたは、伊勢物語にも、

よめる…とよみて「四段」
よめる…とよめりければ「五段」
いひやる…とてやりたりければ「二〇段」
書きつけける…とよみを(お)きて「二一段」
かきつけける…と書きて「二四段」
よみける…とよみたりけるを「七七段」
よみてやりける…となんいひやりける「百二段」
のように存在する。
ただ、

馬頭なりける人のよめる…となむよみたりける「八二段」
段」
女いひを(お)こせたる…といへりけり「九六段」

いひやりたりければ…といへりければ「百五段」のように、リとタリとが使用されている例もある。

(6) 蜻蛉二九三頁の例のすぐ前に、

①年ごろ、あはれと思そめたりし方にて、荒き山路を行き

帰りしも、いまはまた心うくて、この里の名をだに聞く

まじき心地し給。〔源氏 蜻蛉 五・二八九頁〕

②官の上のたまひはじめし、人形とつけそめたりしさへ

ゆゝしう、たゞわがあやまちに失ひつる人なりと思もて

ゆくには、〔源氏 蜻蛉 五・二八九頁〕

がある。①は、全集（伝定家筆本・伝明融筆臨模本・飛鳥井雅康筆本等を底本とし、『源氏物語大成』校異篇所収の青表紙諸本と数種の青表紙諸本とによって校訂したもの。）では、

○年ごろ、あはれと思ひそめてし方にて：

〔源氏 蜻蛉 六・二三五頁〕

のように「たり」が「て」となっている。「そむ」（しはじめる）ということばと持続のタリとが接することはない、との思いから、これを「て」とした、あるいは誤った、ものであるかもしれない（大系の底本は、飛鳥井雅康等筆本）。

しかし、これは、①「当初、いとしいと思っていた」②「人形と名付けていた」ということで、ソムとタリとが接することは不思議ではなく、このタリは存続にあたる。

(7) これは、リ（ハアリ）の成立に関わる問題である。可能性として、二段動詞・三段動詞の連体形ル・已然形レとの関係も考えられる。